

## 令和7年度 第3回 京丹波町子ども・子育て審議会 議事概要

日時：令和7年12月10日（木） 午後1時30分～午後3時30分

場所：京丹波町役場2階 大会議室

出席委員：15名

欠席委員：4名

### 1 会長あいさつ

**会 長：**カレンダーが残り1枚となり、クリスマスのイベントも控えている。京丹波町の秋は素晴らしい。色づいた里山の風景であったり、こども向けのイベントも多く、たくさんのこどもの元気な声を聞くことができた。なによりも実りの秋で、黒豆の枝豆や栗を使ったスイーツ、米もとれる。郷土料理を作っていただいたことがあり、本当に素晴らしい秋を感じた。収穫の時期にはたくさんの方が道の駅にいらっしや、大混雑となって、周囲の道も渋滞し、お巡りさんが交通整理をするほどだった。このようなすばらしい自然環境の中で生活をしていることを誇らしく思っている。

10月11日には京丹波町合併20周年式典があった。その中で中学生の群読が行われ、感動したので読み上げたい。「わたしたちの京丹波 20年のその先へこれからもつないでいきたい 京丹波町の温かい絆を 人と人が支えあうやさしい心を それが私たちのめざす未来 京丹波町はきっと輝き続ける ふるさとはわたしたちのこころのよりどころ これからもずっと京丹波町とともに生きていく」。3つの中学校の生徒からアンケートを行い、集約された京丹波町への思いや未来への希望が群読の中に盛り込まれていると思い、感動した。

前回の審議会では、皆さんの経験談からこどもや若者たちに地域や社会、そしてわたしたちに何ができるかについてたくさんの貴重な意見を出していただき、感銘を受けた。じゃあわたしは何をしているのだろうと考えたとき、まず地域・社会に参加しようと思い、住んでいる地区にあるカラオケ同好会に参加している。その中で、同好会メンバーの区長さんから民生委員になってもらえないかと依頼があり、なにか貢献をしたいと思い、ひとこと返事で引き受けた。そのあとで、わたしは移住組なので地域のことも分からないし皆さんの顔と名前も一致しないので、大変なことを受けてしまったのではないかと思います、前任の方とともに地域をあいさつ回りした。その時にわたしがもし独居老人になったら、どうするんだろうと考えた。どういふサポートがあるのか、田畑の管理はだれがするのか、家の終活はどうしようなど、ナーバスな気持ちになった。高齢者の未来計画というのは、私の中や地域の中にあるのだろうか心配になった。

先日審議会の事前打合せがあり、そのことについて副会長や事務局に話してみ

ると、このこども計画をつくると、その環境のもとで育ったこどもたちは、きっと大人になったらとり残しのない、住みやすいまちをつくってくれる人材になってくれるだろうし、その中でみんながとり残されることのないすばらしい生活が送れると思うので、それを目標にしてこども計画を策定していきましょうと答えてもらった。そこでわたしの不安は解消された。そのために頑張ればいいのだと、納得がいった。

本日は原先生にもお越しいただいている。たくさんのご意見やアドバイスを頂きたい。質疑応答の時間もたくさんあるので、思い残しや言い残しがないように、意見を交わしていただけたらと思う。

## 2 審議事項

### (1) (仮称)京丹波町こども・若者みらい計画(こども計画)の素案について

#### 【事務局による説明】

#### 【原清治・佛教大学教授からの意見・アドバイス】

##### ◎はじめに

私自身、京丹波町の応援団として、この町が大好きなので、いいまちであり続けてもらったらうれしい。こども計画は、京丹波町のこどもたちの未来をどう照らしていくのかという計画。こどもたちの実態やニーズに合っていない計画になってしまうと意味がない。こども施策は予算をつけて進めていくことになる。

こども計画は子ども・子育て支援事業計画の親の概念となるので、こども計画に盛り込まないと事業計画にならない。今日は一番上の概念の、こどもをどうするかということについて皆さんと考えていきたい。それに従って昨年度に策定した事業計画が動いていく。この計画に盛り込まないと実施できないので、しっかり盛り込まれているかを確認することが、今日の会議の重要なポイントになる。

##### ◎計画の素案について

計画の素案を見せてもらった率直な評価としては、飾り抜きで、他の町にはない、良いものができたという印象を受けた。京都府全域のこどもに関する計画を作る委員も務めているが、府の計画と比べても遜色ないもので、京丹波町が独自に作ったものだと評価できる。

理由の1つ目は、計画の中の枠組みが、こども基本法やこども大綱といった国の方針との整合性が図られている。計画の内容は、国政レベルのこども政策とほぼ一致する。

2点目は、後半にアンケート調査の結果が掲載されている。ほとんどの自治体がアンケートをとって計画をつくっている。後半のデータが前半の本編の根拠資料として生きていると思って読んでいただきたい。資料・データと計画が1セットになっているものは少ない。自分の興味のあるデータを後半で見ても実態を把握いただいたうえで、それが計画の本編に反映されているかチェックをしていただきたい。委員の皆さんが、保護者やそれぞれの立場で、こどもにこんなことをやっても

らったら、子育てやこどもの将来に役立つんじゃないかという見方をしてほしい。

3点目は、この計画には弱い立場の子どもたちへの視点がしっかりと盛り込まれている。貧困家庭やひとり親家庭、ヤングケアラー、障害のある子ども・若者たちに、どういった支援が必要かという視点をかなり持って作られていることが見てとれる。行政サイドの計画書としては、こういったことを示している計画はあまりない。とても良い部分であると思う。

#### ◎計画素案の課題について

しかし、この計画について不足している部分もある。忌憚なくという話もいただいたので、しっかりと課題について話したいと思う。

#### ①デジタル化への対応について

これから子どもたちが生きていく中で、一番重要になるキーワードがデジタル化。DXと言われるが、デジタル社会に向かっていく中でどのように対応していくかという視点が、京丹波町は遅れている。自主制作放送を回覧版代わりに見ている子どもたちはほとんどいない。スマホやタブレットの個人のデバイスで情報を手に入れているので、こういったものにどう対応していくのかという視点が大きく欠けている。

学校に行きづらい子どもたちが京都府域で増えている中で、南丹市教委が重視しているのが、「AIドリルすらら」を導入し、子どもたちのデバイスに家でも勉強できる教材をダウンロードして使えるようにしている。AIがこどもの学習を管理し、採点してそのこどもの強みや弱みを教え、苦手な問題に再度挑戦させたりする。学校に行かないのが良い悪いという議論ではなく、不登校が増えている状況に対して、京丹波町も例外ではないと思うが、学校に来るようにするほかに、学習権を保障するためにAIドリルを導入するなどといった視点が欠けている。子どもたちを取り残さないように考えていかないといけない。万が一わが子にそのようなことが起こった場合、京丹波町なら大丈夫だと言える体制をつくらないといけない。何が出来るかという視点を考えていかないといけない。

#### ②こどもの参加の仕組みづくりについて

2点目は、こどもの「参加」の仕組みが書かれていない。子どもたちの声を「聞く」「反映する」という言葉はたくさん記載してあるが、具体的にどうやって声を反映していくのが書かれていない。子ども・若者会議のような場を常設で持っている自治体も京都府内にある。小学校の児童会や中学校の生徒会が意見をまとめて、例えば子ども・子育て審議会の中で意見を言えるような仕組みづくりがない。そのようなことを行わないとこどもの声が届かない。子どもたちをど真ん中に置くなら、子どもたちが来られるタイミングで会議に参加してもらおうことを考えないといけない。

#### ③若者の進路・就職について

この計画は0歳から30代の若者までを対象とする計画で、一貫性はある。しか

し、京丹波町の高校生が不安に思っている「将来の進路をどうやって決めたらいいのかわからない」ことについて具体的にどうするのか書かれていない。また、大学生についても、京丹波町が好きで、大学を卒業したら戻りたいという声もある。地元の企業にどうやったら就職できるのか知ることができるセミナーや、就職案内をどうやって手に入れたらいいのかという施策のあり方が書かれていない。アンケートに書かれている声を、町はどう受け取って、どのような事業を展開するのか。具体的な事業の展開について骨子が書かれていなければ、誰も何もしないし、できない。

#### ④交通手段について

京丹波町の大きな課題は、アンケートに書かれているように「交通手段がない」。こどもからすると、学校やこども園に行くための足がない。これほど住民が足がないと言っているのだから、「京丹波町はそこが不便だね」で終わってはいけない。解決するためにはお金がかかる問題なので、AIやDXでカバーできる方法を考えていく必要がある。もしかしたら必ずしもそこに行く必要はないのかもしれない。京都府や文科省の会議では、委員がみんな自宅からリモートで参加する。その場に行かなくても会議ができるし、決定をすることができる。そのような仕組みづくりも必要になってくる。我々は対面しないといけない、集まらないといけないと思っているが、若者たちは、移動時間を時間のロスだと考え、移動しなくていいものは移動しなくていい、対面でやらなくていいものは対面でやらなくていいと思っている。若者の将来を考える計画なので、若者がこのように考えていることを頭に入れて計画を策定していくことが必要。

近隣自治体の話をもうひとつすると、亀岡市では、不登校の子たちが通える場を具体的に作ろうと計画書に書かれていて、今年度、駅の近くに4か所建てると聞いている。実際に計画に書いて実行しているところがあるのに、京丹波町は計画に「方向性」のみを記載して頑張っていきましょう、で終わっていいのか。掛け声はかけるけれど、具体的にどこに何をいくら使ってつくるまで結びつかないのが京丹波町の良い所でもあり雑なところ。こどもたちにとっては喫緊の教育課題だということを認識すれば、上位概念に出てきてもいい。

#### ⑤防災について

先日、青森県で大きな地震があった。同様の災害が京丹波町で起こった場合、どのように対応するのか。災害時の基本対応、特にこどもたちをどう守るのかという視点が必要。今後4年間の計画なので、今盛り込んでおかないと、災害が発生したり、注意報が発令されたりしてからどうするのか対応を考え出すというわけにはいかない。こどもたちの目線でどう支援したらいいのか、わが子を震災から守るためにどうしたらいいのか、こどもには未来があるので、我々が知恵を絞って考えないといけない。防災計画だけでなく、こどもたちをどう防災に参画させるのかという視点をこの計画に入れておかないといけない。いざとなったときに困るのはこ

どもたち。

#### ⑥計画の運用について

最後に計画の運用に関して、計画策定後、中間見直しをいつするか。策定して2年後に行う場合が多いが、その2年間でどこまでやるのか。見直したら次にどうするか、というPDCAを回していく方法を考えないといけない。そのあたりも網羅して書かないといけない。

**会 長:** 原先生の視点からたくさんご意見をいただいた。皆様のご意見も聞かせていただきたい。せっかくの機会なので、原先生に対する質問も含めて、皆さんの率直な思いを聞かせていただきたい。原先生に進行をお任せしたい。

**原 教授:** 時間いっぱいまで、たくさんの方に自由に意見をいただきたい。

#### ◎委員との意見交換・質疑応答

**委 員:** こどもたちがこのような(子ども・子育て審議会のような)会議に参加できたらいいと、以前から思っていた。先生のお話を聴いて、そういう柔軟なことをしてもいいとさらに思うようになった。自由記述の意見の中に「形式ばった会議だと言いたいことが言えない」と書いてあったので、小学校の高学年以上のこどもたちがざっくばらんに意見を言える、こどもたちと大人たちで話し合える場があったら面白いかもしれないし、本音が聞けるかもしれない。大人としてしてあげられること・してあげられないことがあるので、そのような調整についても話ができるかなと思った。

交通手段問題で、会議などZOOMでも良いのではという先生の指摘があった。デジタル機器を活用した時間の使い方は、大人の方がまず慣れていくことが大事だと感じた。また、災害時のこどもたちの守り方についても、まず親の私がかどもにまだ伝えられていない部分があると思うので、行政が何かをするだけでなく、いま一度家庭でも見直したい。そのための基盤となることを学校や行政で決めていただければ、災害時にスムーズに対応できると思う。

**原 教授:** こどもたちが参加できる会議を持っている自治体は、実はたくさんある。教育委員会と連携すれば、それぞれの小学校の児童会や中学校の生徒会で学校の意見をまとめて、代表としてここで話す機会をつくれると思う。会議のありかたや時間帯は工夫する必要があるが、是非されるといいと思う。

**事 務 局:** 昨年度からこども議会が始まり、小学生が議会や行政に対して意見を発言する機会を設けている。今年度も1月に開催する予定。

**原 教授:** とても良い取組だと思う。もちろんこども議会は1つの意見表明の場であるが、意見を表明する場はいくつあってもいいというのがポイント。こどもたちの事情や状況によって参加できるものと参加できないものがある。重要なのは、その声が届くかどうか、あるいはどう実現するかという仕組みづくり。こども議会は議員の先生方や町長、執行部を前にお話される機会であると思う。同様にこの審議会にも声が届くような仕組みづくりができればいい。

**委員：**原先生から防災についてお話しいただいた。京都市で、親子で参加できる防災イベントが催される。親子でどうやって暗闇から抜け出すかなど、ゲーム的な要素盛り込んで、楽しみながら大事な知識を学べる場になっている。京都市で行うにもかかわらず、参加者がとても少ない。しかし、京丹波町でも一緒に楽しみながら防災を学べるような、こどもをキーワードにした取組を行うことは重要だと思う。

神奈川県葉山町では先進的な防災の取組が行われていて、中学生に対する防災の教育に力を入れていると聞いている。昼間に災害が起こった時に大人は地域にいないので、活躍するのは君たち中学生だということを、押し付けるのではなく、どんな役割があるか、どんなことができるかということをちゃんと伝える活動がされているようだ。こどもたちを守るだけでなく、小学校高学年や中学生は支える側にもなれるという意識を育てていくことも大事だと思う。

49ページに海外からの親子に対する支援や日本語教室などの事業を記載いただいており、そのあたりは継続的に行われている。しかし新しい事業などで見られる、「連携します」「努めます」という記載には、一体何ができるのか、我々のようなボランティアがどこまでできるのかが不明瞭で、不安を感じる。また、ホークスベリー市との交換留学プログラムについて、数年前なら応募が10名くらいあって選考をして参加者を決めていたが、昨年は5名の枠が埋まらず3名、今年も参加者は3名だった。企画情報課が海外交流の専門窓口ではなく、担当者が兼務をしていることは理解しているが、この先、この事業はちゃんと続けられるのか、不安を感じている。応募者が少ない理由もはっきり分かっておらず、交通費だけの費用負担で1か月の貴重な経験が出来るチャンスなのに応募がないのは、こどもたちが忙しすぎるのか、と考えている。ボランティアである我々の活動が続けていけるのだろうか、このままだと先細って消えてしまうのではないかと非常に不安に思っている。

**原教授：**最近の若者たちは内向き志向で外に出なくなってしまう傾向にある。京都府内の大学では、府内出身の学生の割合が近年は7割で、高くなっている。以前は半数以下だった。親もこどもも、自分の生まれた地域を離れたがらない、内向きの志向になっている。文科省が海外留学するこどもの支援をしているが、なかなか集まらない。京丹波町としてもそういった取組があり、5人の枠が埋まらないのであれば、とても内向きな町になってしまうのかもしれない。こどものうちにオーストラリアに1か月滞在し、その体験をレポートにまとめて大学に進学するという方法がある。大学ではそのような体験を重視しているということが京丹波町の保護者の耳に入れば、応募が増えるのかもしれない。町としてしっかりと広報できていないのかもしれないし、専門部署がないからなのかもしれない。子育て支援における情報をどこで一元化し、発信していけばいいのか、整理が必要かもしれない。

**委員：**こども議会については、小学生を中心に行われているとのことなので、是非

とも中高生からも声を聴いていただき、世代に合う政策を具体的にできるようにしていただきたい。

交通手段がない状況は、大阪から移住してきて非常に思った。遊びに行くために送迎が必要で、京都市内に行く手段も少ない。オーストラリアのまちでは、周回バスが30分に1本走っていて、イベントの際にはそのバスを使うので駐車場が無いという。町内でもそのようなバスの運行ができれば、脱炭素だけでなく高齢者の介護支援や病院に行く手段がないという問題の解消もされると思う。

若者の人生を考えた際に、京丹波町には出会いの場が無いことが課題だと感じた。結婚相手と出会えるような場所が京丹波にあるのか。夜景を見たり、食事をしたり、恋愛するようなシチュエーションが少ない。こういう場づくりについては、町の政策も必要かもしれないが、地域ボランティアがイベント等を開催して機会を増やしていければと思う。就職に関しては、町の産業をこどもたちに伝えることや、新たな企業誘致も目標として掲げてやってほしい。また、若者が住める家が、京丹波町には非常に少ないと感じる。若者世代やひとり親世帯が住める環境を整えることが必要。移住者向けの住宅環境も整備してほしい。

小児科の充実が町は非常に遅れていると感じる。京丹波町病院しかなく、土日の診断が受けられず、突発的な病気の際に診断が難しい。今後は、小児科だけでなく、総合内科の開設も視野に入れて、検討をしていただきたい。南丹市や亀岡市まで行って受診するのは、時間のない子育て世代には大変なこと。病児保育も、町内で対応できるように考えていただきたい。

習い事には送り迎えの問題があるので、オンラインの教育プログラムを活用した、デジタルを活用した習い事や教育の機会も検討・周知をお願いしたい。

最後に、京丹波町には仕事が少ないので、保護者は外に働きに出ざるを得ず、災害の際にも戻れない。町内で働ける施設づくりや企業誘致をしていただき、京丹波町で生活ができるようにしてほしい。

また、以前に須知高校の人気を出すためには何が必要かという話をする機会があった。学校は設備が良くても何も変わらない、教育者がどういう思いで何を伝えたいか、どういう風に生徒たちと成長を共にできるかという「ソフト」の部分が一番大事だという話だった。先生自身や教育方針、校則を現代へアップデートしていくことが重要で、進学に関しても、教育のカリキュラムだけでなく、先生の持っている思いや知見をしっかりと活かしていくことが必要になるとのことだった。そういうことを共有していくことの大事さもあると思うところだった。

**オブザーバー:** 小児科について説明させていただきたい。平日の午前中に小児科の診療を担当いただいている先生は、京都府立大学の医局から来ていただいている先生で、大学病院でも診療されている。安心して診療を任せてもらいたいが、そのことが十分に広報できていない。もっと知ってもらえたらさらに信頼してもらえと思っている。

また、総合内科の話が出た。医師の数が減っている中で、京丹波町のような過疎地域の病院は今後、総合診療科でないと医療ができない。その中で、小児科は非常に本当に難しく、京丹波町病院は検査機能が十分に整っていない面があるので、例えば休日の午後にこどもが熱が出た場合、総合診療科の医師が初期対応した後は京都中部総合医療センターや福知山市民病院などにつないでいる。そのような病院間の連携体制は整っている。ご足労をかけることになるが、これが過疎地の病院の現状。また、夜の診療が難しいのは、他の地域でも同様の状況。

京丹波町病院では、総合診療科の設置についてポイントを絞って計画を立てようとしている。現状としては、安心できる先生に来ていただいているので、ご利用いただきたいと思う。

**委員：**3ページの「こどもの声が聞こえるまち」は、この会議で話してきたことが反映されていると感じた。また、小児科の医師について、若い先生が多いが、安心できる先生だということはもっと周知出来たらいいと思う。また診療してもらう時に、町の病院は入院施設がなかったり、検査できる機器が無いので、対応が難しいときには先生自身も「別の病院に行った方がいい」と言われるようだ。そういった状況も変えていけると良い。

以前、須知高校のオープンキャンパスで、鶏を殺して捌いたりしていたように記憶しているが、最近、嫌がられる人が多いという理由から止めたと聞いた。私自身も、それが理由で「この学校には入りたくない」と思った身ではあるが、それは必要なことであると感じるし、頑張るポイントが少し違うのではないかと思う。

こどもの声を吸い上げる場として、放課後児童クラブでの聞き取り調査をしていただいた。実際、直接こどもたちと喋ると、良い意味で好き勝手に意見を出してくれる。アンケートで黙って字で答えるより、お互い話し合っ意見を出し合う方が意見が出てくる。中高生は、人前では話しにくい世代でもあるかもしれないが、その年代にも対面でみんなで話せる場を作るべきではないかと思った。

**原教授：**話を聞いていると、正確な医療情報の発信が足りないように感じた。

**委員：**計画の策定にあたって実施した、小・中学生、若者対象のアンケート調査について、結果を見ると、京丹波町のこどもたちがこどもたちの目線からどんなことを考えていて、何が不便で、どうなってほしいかという意見が書かれている。計画を立てるためのアンケートなので、意見をどう吸い上げてどう変わったのか、こどもたちに見える形で返していくことが大事。第1期の計画なので、ここで「自分たちの意見が伝わった」という実感がなければ、次の回答率は下がってしまうだろう。こういう意見を言ったからこうだったんだという返し方をしっかり考えないと、今後第2期や第3期の計画をつくっていくうえで重要だと思うし、意見を言えば変わってくるんだと思ってくれば、京丹波町への見方も変わってくると思うし、自分が言えば応えてくれると実感できれば、町への関心も上がると思う。高齢者は町のことにしっかり意見を持ち、町の議会や事業にも関心を持っておられる。これ

からも京丹波町で暮らしていく覚悟を決めているので、自分たちの生活に直結することだと感じていらっしゃるから。若者はもしかしたら京丹波町から出ていくかもしれないと思っているので、京丹波町へのこだわりや関心が薄いのではないか。今回のこの意見に対して、意見を生かしてどう変わったのかということ、こどもや若者たちに見える形で返していくことが、関心を挙げていくことにもつながると思う。

交通手段の課題がある中で、町としてもバスの運行継続やデマンドタクシーの取組も和知地区に加えて瑞穂地区でもはじまった。高齢者だけでなく、こどもも利用することができる。今ある公共交通を増やしていくために、どうやって利用していくのかを、行政任せでなくて我々も考えていかないといけない。前回の審議会で話題に上がった、和知地区から町営バスに乗って丹波自然運動公園のプールに行く取組のように、少しでも地域資源を利用するような取組をしていかないと、今ある資源も衰退していく。何とか継続し、利便性を向上できるような工夫を、原教授にもお知恵をお借りしながら、効果的な利用に向けた発信の方法なども含めて考えていきたい。

**原教授：**交通手段は私の専門ではないので、ここについては、計画に盛り込んでおいて、専門の方に考えてもらいながら仕組みづくりを進めていけるようにすればいい。

また、タブレットを活用した意見聴取に関しては明確で、学校で先生方がこどもたちに「ここにアクセスするといい」と伝えること。そうすればデバイスの使い方が向上する。教育委員会サイドで考えていただいて、町からの意見を返す際も、タブレットを使って返す方法を工夫していくと良いし、そこをこの計画の中に盛り込めると良い。誘導すれば、こどもたちは使ってくれる。

**委員：**京丹波町の通信インフラは、自分が移住してきた時は整備が進んでいなかったが、今は改善されてきた。京丹波町は田舎で戸数が少ないので、インターネットの全戸利用は義務付けのような形にしてもいいのではないかと思う。難しい世帯には料金の補助も含めて検討してみても良いのではないかと思う。

以前あった告知放送がなくなり、あんしんアプリに変わった。しかし、高齢者は使いにくいし、若年層は通知がうるさいと感じるかもしれない。告知放送だと夜や朝に情報が流れてきたため、聞き流すだけで情報を入手できたので便利だった。今は町からのお知らせなどを紙で配布しているが、届いた紙の扱いが家によって異なっている。受け取った人が家族まで広がらないと、欲しい情報が届いてない状況につながりかねない。独居老人の世帯では申請した人にSIMカード付きのタブレットを貸し出しているが、あんしんアプリ以外は使えない設定になっている。せっかくだらぬものを配布しているのに、設定のためにほとんど活用できていない。インターネットの補助を行って、LINEなども使えるようになったら、高齢者もさらに活用できると思う。タブレットを全戸に配布し、あんしんアプリでの配信と町

からのお知らせを流すようにできればいい。アンケートについても、始まることを周知することができる。

また、京丹波町は広すぎるので、各地域に交通の足がいきわたらない。遠いところまで全部網羅しようと思うと難しいので、このタブレット端末・デジタル化を活用して、テレビ会議で話を聞くこともできると思う。会議についても、わざわざ集まる必要はあるのかという疑問を持っている。この審議会は重要な会議だと思っているし、今後も機会があるなら、移住者の視点から話が出来たらいいと思う。

最後に、京丹波町では色々と補助金などに取り組んでもらっているが、実際それがどれだけの利用率なのか把握することが必要であると思う。妊婦への補助があるが、実際に使っている方はどれくらいいるのか、もし使っていないのであれば、他の本当に必要な補助に変えていく必要がある。その辺りの数字を入れてもらえると良いと思う。

**委員：**会議や議会に子どもたちを参加させる機会づくりは重要だと思うが、この審議会の環境の中に子どもたちを連れて来たとき、果たして発言できるだろうか。子どもたちが発言しやすい環境を考えた場合、逆に審議委員の方が学校に出向いて、授業の中の一環で、子どもたちが発言しやすい環境で話を聞けるようにする方がいいのではないかと思う。学校へ出向く人数の制限があるのであれば、残りの委員はデジタルで参加することも出来ると思う。学校だと子どもたちとのコミュニケーションは非常に取りやすいが、小人数の子どもを、大人のほうが多い環境、例えば役場や審議会の場に呼んで話ができるのだろうか。学校で自分たちがまとめた意見をただ持ってくるだけではあまり意味がないと思う。思ったことをその場でみんなで話せる空気を作ってあげることが大人の知恵かと思う。

交通手段について、巡回型のバスの話もあったが、そういったバスがあったとして、実際に子どもたちはどう利用するのか想像がつかない。子どもたちに、私生活の中でそういう移動手段があった場合にはどうするのかというところを意見聴取の場で聞けば、ハード面としてどの部分に力を入れていけばいいのかがある程度見えてくるのではないか。

**委員：**先ほどの意見に関連して、子どもの意見を届けることについて、みずほ夕涼み大会という夏のイベントでは、地元の小・中学生が協力して、どんな催しをするのか、ステージで何を出すのかなどを考えている。そのために実行委員会の理事らが小学校に聞き取りに行き、みんなでミーティングしながら意見を吸い上げて帰ってくるようだ。幸い京丹波町は小学校の数は多くないので、学校を訪問して一度話を聞いてきたらいいと思う。やりとりの内容はビデオに撮っておけば、聞き違いの確認ができて、議論の空気感もわかると思う。

加えて、ちょっと言いにくいことは専用のウェブサイトなどを使って、外に漏らさないことを約束した上で、思ったことを精一杯伝えられる場を作れると良い。いじめの相談も、守秘義務のようなところを担保すればできると思う。見えない場所

だからこそ言えることは多分あると思う。

**原 教授:** いじめは、小さい頃から人間関係が変わらない集団の中で頻発する。京丹波町もリスクが高いエリアになる。

**委 員:** 京丹波町でひとり親家庭の団体をさせていただいて20年になる。こどもの居場所づくりの推進についても、学習会等を実施している。ひとり親の方も死別から最近では離別の方が増えている。そういった方への支援として、取組を進めてきた。

私自身、こどもが小さい時に主人が亡くなったので、お金の面で苦労した。進学の際には奨学金の申請も本当に大変で、終わった時にはほっとしたことを覚えている。個人的な話だが、孫が一時期不登校になり、フリースクールに通っていた。両親は仕事をしていたので私が送迎などの世話をしていた。この時に学んだことは、寄り添うことの大切さ。自分のこどもたちは休んだことがなかったので、固定観念を変えるようなことが多く、勉強をさせていただいたと思っている。ひとり親の方と面談するとき、こどもの不登校や親の介護、自身のこころの悩みについて聞くことがある。何もできず、話を聞くだけになることもあるが、何とか頑張っている。

貧困の問題では、大変な状況にあるひとり親家庭の方には、色んな支援を活用して、なんとか頑張ってもらえるように、私も今後も挑戦して取り組んでいきたい。

**委 員:** 小学校の方では、発達障害の子への対応として、支援学級等では知識のある先生に対応いただいているが、放課後児童クラブでは、発達障害に関する知識がない方がいらっしや、障害のないこどもと同じ対応になってしまっていると聞いている。学童放課後児童クラブも教育の機関でもあると思うので、発達障害に関する見識や知識のある方の配置をお願いしたい。

**原 教授:** 教員免許の取得には、特別支援に関する授業を履修しないと、免許を取ることができないので、若い先生だとご存じの方が多い。しかし、一定世代よりも上の先生は意外にご存じでないこともある。そろそろ時間になってしまった。最後に会長からお話しいただきたい。

**会 長:** たくさんの貴重なご意見をいただいた。ハード面でしていかないといけないこととソフト面でできることを分類して、計画に盛り込んでいきたいと思う、

先日、何気ない会話の中で、トマトができる季節を夫が孫に教える場面があった。こどもが知らないことは、それをよく知っている大人との関わりの中で教えていくことが基本的なことなのではないかと感じた。

出会いの場がないという話が出た。中学・高校生活は大いに出会いの場があっというまに過ぎ去り、その中で結婚までつながった夫婦も京丹波町内にたくさんいらっしやる。行政がソフト面でできることに加えて、審議会のメンバー一人ひとりがソフト面でできることは意識化しながら取り組んでいけると良い。

今年度の審議会は残り1回となった。本日のご意見、原先生からいただいた貴重なご意見を踏まえた計画素案への修正については、事務局と会長・副会長に一任し

ていただければと思うがよろしいか。

**委員**：異議なし。

**会長**：良い計画となるよう努めていきたい。引き続きよろしく願います。

### 3 事務連絡（次回予定）

【第4回審議会】日時：令和8年1月26日（月） 13：30～

場所：大会議室（本庁舎2階）

### 4 閉会あいさつ

**副会長**：原先生から指摘いただいたものの中には、点としては京丹波町は実施していると感じたものがあった。デジタル化について、全国で200校しか取り組んでいないリーディングDXの取組を令和6年度から和知小と和知中で研究指定校として取り組んでいるが、誰もご存じないのではないか。学校単位では進んでいるが、まだ点でしかない。しかし、点としては事業は始まっている。放課後デイサービスはNPO法人スマイル頼りになっていて、ほかの施設がないため、南丹市に行く京丹波町のこどももいる。点ではできているのに、なかなか線や面にまでつながっていかない。今日の原先生のお話を聞いて、取り掛かりはできているものをいかに稼働させていくかを、行政はもちろん、ここに集まった皆さんからも、今後たくさんご意見を聴かせていただきたい。

対面しないオンラインの会議もいいが、私はこうして対面で話をするのがいいと思う。京丹波町にはたくさんの会議がある。顔を見ているからこれだけ話せると思う。委員の皆さんにはご苦労の中出てきていただいているが、そのような良さがある。この審議会は、前の期から必ず誰かが発言されていて、黙ったことがない。声を吸い上げていただいている会議だと感じるので、大事にしていきたいと思う。

アンケートの結果で、こどもたちの自由記述が大事だと思い、読み返していた。小学生から「町全員の人と交流できる場がほしい」という意見、中学生からの「行事や町にもっと貢献したい。手助けは町民全員ですればいい」、若者からは「ゆるく集まれる場所がほしい」という意見があった。ただ、若者たちからは「地域特有の負担がのしかかってくるので、その解消について考えてほしい」という意見もあり、京丹波町はいいところだけれど、考えていかないといけない部分もあると感じている。

和知中の生徒と関わるが多くあり、行事や授業参観に行ったり、一緒に花を植えたりしているが、とてもいい子たちだと感じている。課題を持ったこどもや、不登校のこどもにも、学校が離れたり孤立したりしないようにいろいろな努力をしておられる。こどもたちと交流するのは楽しく、温かな気持ちになる。声や人を増やすことも大事だが、今これだけよく育ってきている京丹波町のこどもたちや若者を、今さまざまな支援で支えて、今この子たちをどう幸せに、将来に向かって育てていくかということをもっと考えていきたいと思う。